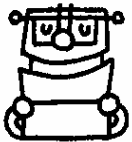


小 / 理科 / 6年 / 生物と環境 /
人と動物の体 / 理解シート

イヌと人の骨ばんの大きさのちがいは、なぜなの



イヌは4本の足で体をささえて歩き、人は骨ばんで体をささえ、2本足で歩くことからくるちがいのさ。

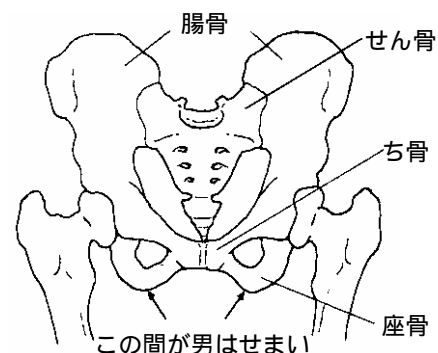
骨ばんは、後ろ足の骨や筋肉^{きんにく}をささえるもので、背骨^{せぼね}をもち、後ろ足を使う動物には必ずあります。足がないヘビやクジラには、骨ばんはほとんどありません。

骨ばんは、背骨の一部、せん骨、び骨、腸骨、ち骨、座骨^{ざこつ}などからできています。これらの骨は、子どもころははなれていたものが、成長するにつれてくっつき合い、形を変えていきます。動物の種類によっても、くっついて一つになっている部分が少しずつちがい、鳥のなかまは、成長すると全部が完全に一つになっています。

イヌなどは、四本足で体全体をささえ、骨ばんは、後ろ足の骨や筋肉をささえるだけですみます。ところが、人は二本足で立って、体全体を背骨と、その土台の役目をしている骨ばんでささえています。だから、人の骨ばんのほうが、体全体の割合から見ても、イヌより大きくなければ、役に立たないのです。

骨ばんは、背骨、内臓^{ないぞう}をささえ、赤ちゃんもささえる

骨ばんは、腸などの内臓もささえる役目をしていますから、成長するにつれて、腸骨、ち骨、座骨がくっつき合い、ち骨は前の方につき出てきます。男と女でも骨の形がちがってきて、女の方は骨ばんが広がってきます。これは、赤ちゃんができたとき、だんだん成長する赤ちゃんの体を骨ばんがささえ、やがて、赤ちゃんは骨ばんの中を通して生まれてくるからです。



<人の骨ばん>